



本化的文化生括

岡 鳴 月

感謝、報恩、感徳、報徳!! 何んぞ觀念の美なる、又人生の靈上として將又真人としての價値、全く此處に存するを知るのである。

今や文化の發展は日進月歩、其の反影としてか思潮の流姿は千態萬狀で、而も其の善的飯趣を知らない、天下の全人迷惑の暗雲に閉覆されて、其の前途の光明を失ひ、前まんに道なく、住らんに處なく、匹夫野人と雖人事の不祥生活の不安を涕泣せざるはない。玆に於いてか憂人概世の仁人は嘆して之れが救援の道を莫不購雖、未だ其の當を得ない耳ならず、反つて赤荒の巷は益々赤變荒化し思潮の混濁は日夜に汙物を混入して、目眩しい文化開明の裏面には、精神的人生の進路愈々錯雜し、宇宙の全人は皆徳薄垢重の極に達して居る。惟ふに之れ、外と文化開進の物光に驅られ、内ち神冥佛陀の慈光を失ひ、人情自然の美は陰れて、人事の凡て赤化の泥池に陥れるのでは無かろうか。約言すれば人間相互に感謝感徳或は報恩報徳の觀念は地に落ち、人間通有の私欲私情に捕らはれて、天理人道の本源を忘れて居るのである。所謂宗教的に之れを謂へば信仰と云ふ美的念慮は皆無と云つてよい位である。

「信道源功德母」と佛陀は説化し孔夫子も五常の中に信を加へてある凡べての人が此の五常の信は、佛が勸むる所の信仰、即ち神佛の前に額いて合掌し、祈願し誓願するものと異り、早く云へば世間的のもの信義信用などと云つて、決して花や線香の薫りのしないものだと考へて居るが、之れは大なる誤解である。佛の示

した信仰とて、世間を離れた信仰で無く、又孔子が云ふ所の信とて、佛道神道の云ふ信仰を離れた信ではない、凡へてものを信するの觀念即ち一信念を名けて宗教的意味を加味して信仰と云つたのである。故に人間の言行動作が、必ず一信念に依つて左右されて居る。其處で信道源と云つたのである。彼のグライクの哲人フィロソフの如きも「信より智は來り智より徳は來る」と云つて、人事の凡べて信が根本なる事を極言して居るではないか。

然し只信仰の二字を以て、萬事を解決せんとすると或は窮屈かも知れないが、三思九考の後には必ず此の信念、即ち信仰と云ふものに依つて解決されるのである。今其の信仰は、然らば何に依つて起るかと云ふ事を知らなければならぬ。云ふ迄もない、慙ふした美的觀念たる信仰は本より温情幽微の切なる認識觀念より起らなければならぬ、所謂信仰の出發點、否其の原質は即ち感恩の情である、靜に考慮した時、而して萬有の上に働いた時、此の感恩の情程、人間味のある而も眞善美の三者を圓滿に具備した神秘的なものはあるまい。

其處で古來の聖賢は此の情味の表現なる四徳を説き、聖者佛陀は四恩とて一父母、二國王、三衆生、四三寶の四恩を垂訓された、此の四恩の中、一二及四の恩徳は人間として適切に觀し、又報謝と云ふ事も可なりに知つて居るらしい、處が社會十中の八九の人が、此の第三一切衆生恩即ち社會的人類相互に蒙つて居る恩寵と云ふものは殆んど知らない様である。然も方今世界人類として、最も痛切に要求する世界的平和は他の三恩は勿論であるが、此の人類相互の感恩と云ふものが、最も有數の要素をなすものである。例せば物價暴騰に際し、神佛には濟まないが、一儲けして一躍千金の成金の風を吹かしてやらう、と云ふ人間的な所有欲に蔽はれ、自己と云ふものに驅られて、他を省みない是れ即ち尊貴勢に對しては似て非なる感謝の念もあるが同等人類に向ては、更に感恩の念がない、自分のみの存在を認めて自己保存、自己満足の主我的快樂派の盲者となるのである。其處で他人は此の非を鳴らし邪を結責して、其處に諍鬭不和、喧嘩修羅の巷に化するのである。而も人間各自は、此の主我的乃至愛己的の盲者としての同行者である。人を見たら泥棒と思へ」

の里諺的現實界である、故に不儀非道の名譽を欲し地位を頼み財寶を蓄へて得々としておるのである。然るに、吾々人間は無心の内に、有情非情を向はず宇宙大自然萬物の恩恵を受けて居るのである。況や人間相互に於てをやである、佛陀は先づ此の觀念を助長せしめて、平和の都を創造せんとした。故に信解品には、佛陀自ら此の大自然を以て自我とし、而して天地の廣大を主觀的に一信仰の軌範に依つて、人生各自に此の恩恵を示された。所謂「世尊大恩在乃至不能報」の四十余字を以て示された、世尊とは此の實在界である、實際吾人が此の大我から受得する所、又人間相互の恩恵と云ふものは、測量する事は不可能である。故に先此の感恩の念が人間進路の第一歩を爲して居るものである。

其處で日蓮聖者も亦此の範を指示された、宗祖の船守彌三郎許御書を拜すれば判るが、御自分の化導に依り而も記別を與へられた、一信者一行者の彌三郎に對し其の供養法師の衆生恩に感銘せられて、彼等夫妻を以て、我が父母の恩徳と同視せられ感謝の意を表示し玉ふた、恚ふした觀念に住した時、自己に對する凡べの物は法性の妙用とて更に呪咀憤怒の情は起るべきでない「渡る世間に鬼はない」と里諺に至つても諒解されるのである。故に日蓮聖人は釋迦に提婆的、逆惡非道の東條左工門景信に對する態度は、「我れ先づ景信を成佛させんと」の大抱擁性を持つて、即ち敵に報するに徳を以て仕へ玉ふたのである。

如斯して一信仰の許に感恩の情操を養はれ、一大安心を獲得し玉へる日蓮聖人の身邊には、名譽、地位、財産は勿論自己の存在するも認められなかつた（本より惜無上道故愛身命と云ふ事は云ふ迄も無つた）故に「世間を以て論すれば日蓮は閻浮の第一貧乏人である然れども精神的安定を以て論すれば世界第一に富める者なり」と、大言壯語せられたのである。

此の軌範を去て、吾人の進路もなく目的も無い従つて安住所も無い只一つの感恩の念慮に因て獲る所の結果は恚ふした絶待的人間相互の存在を計り、又一つの信仰に因つては人生最善の極裡に達して大安心を得、

眞の平和を喚起するのである。

天地間最下の動物乃至非情物に到る迄、感恩と云ふ美的行爲がある、況や靈長としての吾人に此の感恩の情無らんやである、此の感恩の情、神佛に對しては慈悲と表れ、人類に對しては信仰と現はるのである此の慈悲と信仰の接觸する所に、萬物の價值と、人間味を計る事が出来るのである。

二三世紀の昔から改革改造の聲は、吾人の耳朶を叩いて居た然かし末だ其の實現を見ない故に此等の文字否叫びは、單なる時代の流言としか思はれなかつた。愆ふして遅々たる社會歩調の中にも微少ながらに其の改革改造の花は咲き、方今文化生活とて、やゝ人間味を帯び人生に幾分の満足を與へるかの様に思はれる。然し本化的見地から之れを見た時、只現在實行されんとしつゝある文化生活は、人生を容れる外殻のみである。實際其の主人公たる人間の文化的生活は奈邊に存するか、疑はなければならぬ此處である、大業として否本化的見地の超勝なる所以は上述の如く、一感恩の情に活き、一信仰の念に住して、所謂報恩生活に住した時始めて、人生として眞の文化的生活を營むものと見做す事が出来るのである。

要するに物質文化の上に精神文化、即ち本化的信仰に活きる所、眞實生活の安定と、眞の平和とを把取するのである。……紙上有限の事故概略を記して本化的文化生活の骨目を揭示した譯である。



私の生命觀

渡邊 泰 深

人若し、九州の地圖を開かんか、鎮西唯一の大都會、玄海灘怒濤の灣頭に當りて、松録翠を重ね、白砂渺